

特集論文

教職新科目「総合的な学習の時間の指導法」の実践（1）

—授業内容と学生アンケートから—

Practical Report of a New Teacher-Training-Course Subject 'Teaching Method of Time for Integrated Learning' : Lesson Content and Questionnaire Results

谷尻 治

TANIJIRI Osamu

(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

貴志 年秀

KISHI Toshihide

(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

梶村 麻紀子

KAJIMURA Makiko

(和歌山大学教育学部)

古賀 庸憲

KOGA Tsunenori

(和歌山大学教育学部)

受理日 令和4年1月31日

抄録：教育職員免許法の改正に伴い、教職課程新科目「総合的な学習の時間の指導法」が2021度から本学でも開講された。教職課程コアカリキュラムに示された全体目標の達成を目指し、学部段階で学生の資質・能力をいかに身に付けさせることができるか、試行錯誤を繰り返しながら授業を運営した。体験的・協働的・探究的・能動的・実践的な授業とするために担当教員が工夫を重ねて実施した活動や授業内容を具体的にまとめた。受講生による授業評価アンケートから「新しい知識・考え方・スキル等が修得できた」といった成果が見える一方、受講生自身による省察の必要性等の課題が浮き上がった。授業の詳細については、貴志（2021）「教職新科目『総合的な学習の時間の指導法』の実践（2）—受講者の体験をもとにした教材化を通して」を参照のこと。

キーワード：総合的な学習の時間の指導法、カリキュラム、アクティブラーニング、協働、探究

1. はじめに

教育職員免許法の改正に伴い、2019年度から、教職課程に「総合的な学習の時間の指導法」（以下、「指導法」）の授業が必修科目として新たに設定された。弘前大学（2021a）は、「指導法」の実施状況等に関して、教職課程認定を受けている559大学1513学部学科課程等を対象にアンケート調査を行った。この調査結果を綿密に分析し、「指導法」とそこにおけるアクティブラーニングの実践を構想・実施・改善していくためのヒントを掲載したハンドブックをまとめている（弘前大学2021b）。この中で「『指導法』の課題 大学の現状」として、次の5点を課題としてあげている。

- ①受講者数の規模が大きいこと
- ②時間数が足りないこと
- ③学生の総合的な学習の時間（以下、「総合」）体験の乏しさの問題、もしくは「総合」体験のばらつきの問題

④コミュニケーションを苦手とする学生が少なからずいること

⑤教員養成カリキュラムの構造の問題

特に⑤は、「児童・生徒の変容は長いスパンをかけて起こるもの（中略）長期にわたる観察が必要」であるとし、さしあたり、「指導法」での学びを通して「自身の変容として学生がとらえていくことが児童・生徒の変容への気づきにつながるのではないだろうか」と、受講生が「総合」での学習・学修を省察することの必要性を強調している。また、栗山（2020）は、学生が他の教科等に比べて学習体験に濃淡があることに着目し、「指導法」の実施にあたって次の3点を課題としてあげている。

- ①受講者の多様な学習体験に配慮すること
- ②授業の初期段階で、「総合」について思い出したり、振り返ったりする時間を設けること
- ③活動だけが先行し、学習が形骸化する可能性
開講間もない「指導法」は大学教育においてまさに

試行錯誤の真っ只中にある。

本稿では、弘前大学(2021b)や栗山(2020)があげた課題を念頭に置きつつ、それらの課題を克服する「指導法」のあり方を、開講初年度の本学における「指導法」の具体的な実践並びにその成果と課題を示すことで考えたい。

まず、「2. 授業の構成」で、授業で重視したことと授業計画・授業形態、「3. 授業の概要」では、各講の授業の進め方と工夫点を述べる。次に授業で重視したことの中から、「総合」を進める際の肝ともいえる体験活動と探究活動を学修する授業内容を「4. 体験・探究活動の重視」で具体的に示す。さらに「5. 成果と課題」で2021年度の成果と課題を整理し、「6. まとめ」で本稿をまとめたい。

2. 授業の構成

2.1 授業で重視したこと

授業は一講が90分、全十五講で2単位となっている。「総合」の特性や学校現場の課題(「総合」の内容をしっかりと実施していない教員が多い、探究的な学習の過程をきちんと指導出来ない教員が多い等)を踏まえ、受講生が「総合」の魅力を知り、さらに実際の指導法が少しでも身につくような授業を目指して、以下のような5点を意識した内容をふんだんに入れた。これら5点は担当教員の一人が研究代表として取り組んだ経験¹⁾を基としているが、弘前大学(2021b)が紹介した「指導法における工夫」とおおむね重なっている。

- ①体験的…説明だけでは理解が深まらない。実際に取り組んでみて、その効果や課題も体感できる。
- ②協働的…協働が受講者のつながりを生み集団としての高まりに繋がる。他者の多様な意見や振る舞いにふれて、受講生の学びが深まる。
- ③探究的…探究を自ら行うことで、具体的な指導のイメージをしっかりと持つ。
- ④能動的(アクティブ・ラーニング)…ペア活動、グループトーク、ミニ・ディベート、制作、グループ発表等はどのように進めるのか、手法と共に実際に指導する際の配慮点や注意点も身につく。
- ⑤実践的…受講生の学習体験の格差を補うため、具体的な実践を多く取り上げる。何より「総合」が「楽しい!」と実感できる。

2.2 授業計画と授業形態

次に学習内容と授業形態について記す。授業では、コアカリキュラムが示す「意義と原理」「指導計画の作成」「指導と評価」を含め、学校現場で実際に扱うであろう探究課題について、現行の小学校並びに中学校学習指導要領で取り上げられているものを網羅した(国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課

題、地域や学校の特色に応じた課題、児童生徒の興味関心に基づく課題等)²⁾。

授業内容をデザインする段階で、初等教育段階と中等教育段階の内容をバランス良く配置した。受講生の免許校種が小学校・中学校・高等学校・特別支援学校と多岐にわたることもあるが、発達段階の違いによって「総合」の学習内容や進め方も異なってくることを理解させるためである。

授業形態は、オンデマンド型の授業と対面授業を組み合わせた。受講生170名全員を1室に収容するのが困難であったため、一斉講義型で進めることが可能なもの(第1講・第8講・第15講)は、Moodleを活用したオンデマンド型で行うこととした。ワークシートや資料を各自がダウンロードし音声入力付きパワーポイント動画を視聴する。講義後に課題レポートを提出させ、学習の理解度を評価することとした。

対面授業は、受講生をA・Bの二つのクラスに分けた。体験や協働を重視するため、できる限り小さな単位で授業を進行することとした。また、「観察・実験」や「見学・調査」といった自然科学系の要素が強い授業は、A・Bそれぞれをさらに2分割し、40～45名程度で実施できるようにした(資料1)。

講	学習内容			
	A-1 約45名	A-2 約45名	B-1 約40名	B-2 約40名
1	意義と役割、目標・学習課題の設定			
2	初等教育 入門編		中等教育 指導計画	
3	初等教育 指導計画		中等教育 キャリア形成の視点	
4	初等教育 言語能力育成の視点		中等教育 探究的活動の視点	
5	中等教育 指導計画		初等教育 入門編	
6	中等教育 キャリア形成の視点		初等教育 指導計画	
7	中等教育 探究的活動の視点		初等教育 言語能力育成の視点	
8	観察・実験 事前学習			
9 ~ 11	観察・実験		見学・調査	国際理解
		観察・実験	国際理解	見学・調査
	見学・調査	国際理解	観察・実験	
	国際理解	見学・調査		観察・実験
12	地域連携・SDGs		情報活用能力	
13	教科横断・カリキュラムマネジメント		地域連携・SDGs	
14	情報活用能力		教科横断・カリキュラムマネジメント	
15	学習状況の多様な評価法と留意点			

資料1 授業計画

3. 授業の概要

教職課程コアカリキュラムを参考に、授業の到達目標として次の3点を設定した。

- ①「総合的な学習の時間」の意義と目標、「総合的な学習の時間」に関する教育課題について理解する。
- ②課題設定や探究的学習の指導法、教科横断的・総合的な視点に基づく学習計画について理解する。
- ③協働的または体験的活動を指導する際の留意点を理解し、発達段階や学習効果を踏まえた指導の基礎を身につける。

続いて、全十五講の授業の概要を記す。()内

は、担当教員名、当初計画した授業スタイル→感染対策に配慮した実際の授業スタイルを示している。

第1講：意義と役割、目標・学習課題の設定

(担当：谷尻、オンデマンド→オンデマンド)

地球温暖化が進んでいることをグラフで示した上で「地球温暖化をいかに食い止めるか、経済活動を抑制してでも温暖化防止を優先すべきか」という問いをたてた。この問いに対し、「正解」とよべるようなものを簡単に導き出すことは難しい。現代社会は「正解」がひとつとは限らない問い(課題)に満ちている、そこでは「最適解」を試行錯誤の上で見つけ出すこと、そしてそれらを実行することが重要となる。他者と協働で「最適解」を考え、実現のために関わられる人の育成を目指すのが「総合」であるとおさえた。

次に、課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現という「探究的な学習の過程」(以下、「探究の過程」)をおさえると共に、学習指導要領の目標を確認させた。さらに、「探究の過程」を一年間かけて丁寧に行っている小学校実践(『われらが鯛のふるさと～加太が新たな町づくり挑む～』和歌山市立有功東小学校6年光組)を具体的に紹介し、受講生に「総合」のイメージと可能性を共有させた。

また、本時の課題(宿題)として、「小学校・中学校の『総合的な学習の時間』でどんな学習を体験したか」、というテーマで800字以上のレポートをまとめさせ提出させた。

第2講：初等教育 入門編

(担当：貴志、対面→対面とオンデマンド)

初等教育の1時間目は入門編と題し、①「総合」創設の経緯、②受講生が学んできた「総合」、③「総合」と教科学習の違いについて学習させた。

①「総合」創設の経緯については、「なぜ、『総合的な学習の時間』が必要だったのか」という問題提起のもと、中央教育審議会第1次答申(H8.7.19)→教育課程審議会答申(H10.7.29)→学習指導要領改定(H10.12)と時系列に当時の教育の大きな流れを説明した。とくに当時キーワードとして使われていた「生きる力」や「創意工夫を生かした特色ある教育活動」について考える時間をとった。

②、③については、グループ学習を中心に行った。5～6人のグループに分かれ、②では、受講生自身が体験した小中学校時代の「総合」の学習内容について話し合わせた。また、それぞれの体験した活動の中に「探究の過程」があったかどうかについても考えさせ、当時の学習を探究活動という視点で振り返らせた。

また、入門編のまとめとして、③「総合」と教科学習の違いについても考えさせた。具体的には、指導内容・方法、評価等、両者の学習活動の相違点を考えさ

せ、その違いによって起こる(であろう)長所と短所をワークシートに書き込ませた。なお、③については、グループで意見をまとめ、掲示用の大きなワークシートに書き込み全体発表も行わせた。

第3講：初等教育 指導計画

(担当：貴志、対面→オンデマンドと対面)

受講生に「総合」の年間指導計画をつくらせることが最終目的の2時間目。初めは、「総合」の時間で取り上げる学習(探究)課題について、学習指導要領の記載例をもとに学んでいった。また、受講生が小中学校時代に体験した「総合」(第1講の課題及び第2講②)がどのような課題を扱ったものであったのかについても考えさせた。この活動もグループに分かれて行い、どのようなカテゴリーの課題の学習が多いのか、また、深く印象に残る「総合」は、課題解決のためにどのような活動をしていたのか等を話し合わせた。

年間指導計画作成にあたっては、サンプルとなるいくつかの年間指導計画面案(年間継続型・学期分散型・集中型・並行型・複合型)を最初に紹介した。校種・学年や扱う探究課題によって、様々なスタイルの年間指導計画が考えられること、また、それらの計画面案には特長があることを学ばせた。そして、最後に、年間継続型の指導計画「南海トラフ地震に備えて」～今私たちにできること～を作成させた。これは、全受講生が「防災」という同じテーマのもと、学期ごとの指導計画を考えるとというものである。設定は小学校4年生、「総合」の全70時間をフルに使って考えた受講生が考えた計画面案は、それぞれに特色があり、大変興味深いものも多かった(資料2)。

4月	5月	6月	7・8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
南海トラフ地震に備えて～今、私たちにできること～										
Step 1 地震について正しい知識をつけよう			Step 2 未来の地震対策会議!				Step 3 防災らししを作ろう!			
1. 地震について知ろう。 ① なぜ地震が起きるのか? ② 震度・マグニチュードと震源の深さ ③ 大きな地震を体験しよう。 (校外学習) 2022年に開催される堺市総合防災センター(仮称)を訪ねよう ④ 地震が起きたらどうなるか、過去に起こった地震を調べよう ⑤ (校外学習) 神戸湾震災メモリアルパークで、阪神淡路大震災を調べよう。 ⑥ ①～⑤の学習結果をまとめよう。 (ポイント) 地震の揺れはもちろん脅威だが、それ以外の影響も考えよう。			1. 南海トラフ地震について調べてみよう。 ① いつ起こる? ② 規模はどれくらい? ③ 東北大震災で東北を襲った「黒い津波」について考えよう。 ④ ①～③のマップを見て、自分の地域の予測震度と津波が到達するか確認しよう。 4. 備えあればやや安心なし!～おうち編～ ① 防災バッグを作ろう。 ② うちの安全チェック!(家具が固定されているか確認しよう。) ③ ①: 家にいるときに地震に襲われたとき、どうすればいいだろうか? ④ 備えあればやや安心なし!～おそと編～ ① 外出中に地震に襲われたとき、どうすればいいだろうか? ② 伝言を残す方法を知らう。 ③ 避難所マップを作ろう。				1. 印象に残ったことをまとめよう。 2. 地震が起こったときの行動をまとめよう。 3. 防災らししを作ろう。			

資料2 受講生が考えた年間指導計画面案

第4講：初等教育 言語能力育成の視点

(担当：貴志、対面→オンデマンドと対面)

初等教育の最終時間(3時間目)は、「言語能力育成の視点」と題して、新聞を活用した「総合」の授業例を紹介し、実際に受講生にも新聞を活用した授業を体験させた(新聞活用体験については本稿「4. 体験・探究活動の重視」に詳しく記載)。

まず初めに、総務省情報通信政策研究所がまとめた

「令和元年度 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」報告書(2020)の一部を例に挙げ、主要メディアの平均行為者率について紹介し、情報メディアとしての新聞の利用状況について触れた。続いて、小・中学校の授業で新聞(あるいは新聞記事)を活用することの意義について、子どもたちの言語能力(講義では“ことばの力”と言い換えた)育成の視点で考えることにした。また、学校現場で行われている新聞活用の授業動画(①4年生朝の会での「新聞記事紹介」②1年生国語「ことばみつけ」)を視聴、実際の授業での新聞活用例について感想を出し合った。

最後に「新聞の中から「総合」の課題となりそうな記事を見つける」という模擬体験も行った。興味のある新聞記事を選び、その記事についてペアで意見交換をしたり、記事に対する意見や提言をまとめたりするというような活動で、学校現場でも実際に行われる学習方法である。



写真1 選んだ記事について意見を交わす受講生

第5講：中等教育段階 指導計画

(担当：谷尻、対面→対面とオンデマンド)

冒頭で、「運動会の応援合戦」「他教科の補充学習」「席替えの話合い」など10項目をあげ「総合」にふさわしくないものはどれかを考えさせた。実はこれらは文部科学省がいずれも「総合」にはふさわしくない」と示したものである。受講生の体験からすると「ほとんど、「総合」で体験したもの」であるため、ちょっとした驚きとなる。次いで、第一講の課題レポートから「これぞ、「総合」の王道」とよべるような受講生の学習体験を紹介し、「適当にお茶を濁した「総合」と、このような探究的な学びを体験交えて積み上げた「総合」では、生徒が身につけるものは大きく違ってくることは想像できますね」と、受講生に呼びかけた。計画的で系統性をもった「総合」がいかに重要かをおさえ、ここで中学校学習指導要領の目標及び内容を確認した。

担当教員(元中学校教員)が、「総合」導入期、誰も「総合」を指導したことがない段階で、どのようにして一から「総合」の計画をたて、具体的な教材を学年教師と共に創り上げたのか、当時の京都市立大枝中学校

の総合的な学習の時間『HUMAN TIME』(生と性、福祉・健康、人権等について探究的に学ぶ)の原案と資料を用いて具体的に紹介した。その際、「学習テーマを決めるにあたり、生徒と地域の実態をもとに、どんな学習が必要かを考えることが大切である。借り物のテーマでは学習は深まらない」と強調した。さらに、生徒分析に基づいて、ねらいにそった学級の総合テーマをどのように設定するのか、個人で案を立てた後、5～6名のグループで検討し決定するという仮想学年会を体験させ、最後は決定した学習テーマなどをレポートにまとめさせた。

第6講：中等教育 キャリア形成の視点

(担当：谷尻、対面→オンデマンドと対面)

導入で、「ある大学のキャリア支援室に2種類の札束を積み上げ、『正社員の生涯賃金2億3100万円、フリーターの生涯賃金7600万円。あなたは卒業後、正社員とフリーターどちらを選びますか?』と書いている。この展示にあなたは賛成か反対か」という問いを設定し、5～6名のグループでミニ・ディベートを行った。これは、受講生自身にとっても他人事でない話題であり、これを切り口にして、キャリア教育は自分事として考えることが大切であるという隠れたメッセージを送るというねらいがある。

「総合」では、主に中学校段階で2～3日程度の職業体験を実施している学校が多いが、「体験だけで終わらないキャリア教育のあり方」を具体的に取り上げる。その一つが、担当教員が行ってきた『FUTURE TIME』である。中学校2年で実施したこの学習は、職場体験に行くまでに、講演会→課題学習(労働をめぐる日本の状況を、「女性と職業」「障害者と職業」「若者は今」「将来の夢」等、学年教員が一つのテーマを担当し、順に教室をまわって指導)→職業聞き取り調査とその交流→事前指導(挨拶や電話の取り方、事前事業所訪問)をおこない、それらを経て、三日間の職場体験→個人新聞の作成を行っている。さらに、ワーキングプア問題を取り上げて、「将来の夢を持たせるだけのキャリア教育で良いのか」と受講生に問いを投げかけつつ、「あなたは、どのようなキャリア教育が望ましいと思うか」という課題でレポートをまとめさせた。

第7講：中等教育 探究的活動の視点

(担当：谷尻、対面→オンデマンドと対面)

まず、平成29年度全国学力・学習状況調査【小学校】調査結果資料から、「探究の過程」を意識した指導ができていないか等の質問に対し、「よくしている・どちらかといえばよくしている」と学校が答えている割合と、児童生徒が答えている割合にずれがあることをグラフで示した(教師のほうが「よくしている」等の割合が高い)。さらに「探究の過程」の四段階で、教員

は指導する際にどの段階が難しいと感じているか」の結果をおさえて、「探究の過程」をきちんと指導することは簡単なことでなく、特に「課題の設定」が学習の成否の鍵を握っていることを確認した。次いで、「総合」を指導する学年教員たちが、担当専門科目が実技教科であったり、若年教員であったりするケースが多い中等教育段階で、どのように探究的な学びを実現するのか、資料を用いて具体的なイメージを共有させた(担当教員が行った『LOCAL TIME』=京都を知る、現地フィールドワークを含む壁新聞制作等)。

後半は、中学生が夢中になって取り組んだ実践記録「生徒自身がとことん追究—少年法調査隊」(谷尻2005)を配布し、「なぜ、中学生はこれほど夢中になったのか」を読み取らせ、グループで交流させた。さらに、生徒が行ったプレゼンテーション(「外国の少年法と少年犯罪」、約10分)の動画を視聴させた。このプレゼン発表は、生徒が原稿を見ないで、ペープサートを用いたり、クイズ形式で参加型の内容にしたりするなど、生徒を惹きつける内容となっており、受講生にとってもおおいに参考になるものである。最後に、「プレゼンテーションを生徒に指導する際のポイント」をレポートにまとめさせた。

第8講：観察・実験 事前学習

(担当：梶村、対面→オンデマンド)

観察・実験の一例として、チリメンモンスター(チリモン)についての学習を2回(事前学習・実習)に分けて行った。チリモンは、イワシの子どもの加工品であるチリメンジャコ・シラスの中に混じったチリメンジャコ以外の混合物の総称である。事前学習では、①チリメンジャコとチリモンについて、②チリモンの実習と教育現場での活用法について、それぞれ説明した。

①では、「きしわだ自然資料館」と「きしわだ自然友の会」が開発した学習プログラム、「チリメンモンスターを探せ」について説明し、チリメンジャコ・シラスの主な材料となるイワシ類の外部形態の解説をした後、様々な形で食されるイワシの加工品について話をした。そして、和歌山県農林水産部水産局水産振興課制作の「和歌山魚ツチング シラス編」のYoutube映像を視聴させ、シラス漁とシラスの製造工程、また、その際に生じるシラス以外の混獲物(チリモン)の解説を行った。②では、実習に必要な道具、名前を調べるときに使用する各種図鑑(書籍、Web)を紹介し、図鑑で使用される用語の説明も行った。また、成体と大きく異なる形態を持つチリモンとして、ゾエア、メガロパ、フィロソーマ・アリマ幼生などは、それぞれの生活史を含めて解説した。そして、学校現場での活用例や標本作り、工作など、チリモンを使った様々な実践例を紹介した。講義の最後にはFormsを用いて

学習内容の確認テストを行った(全11問、正答率平均91%)。

第9講：観察・実験

(担当：梶村、対面→対面)

チリモン実習では、受講生を5~6名のグループに分け、チリモンの仲間分けポスターを制作させた。この学習には、チリモンを手にとって観察し、その特徴を探して、図鑑で調べるという一連の作業を体験させるという目的がある。制作にあたっては、①チリモンの名前は図鑑(書籍・Web)を用いて調べ、書き入れること、②完成後にボードに貼って掲示できるように、チリモンをボンドで接着させること、③ポスターには、タイトルと作品の説明を入れること、の3点を指定し、仲間分けのテーマは自由に設定させた。各班にはそれぞれチリモン、虫眼鏡、ピンセット、紙皿、木工用ボンド、図鑑数種、模造紙(四つ切)、筆記用具を配布した。Web図鑑は各自が所有するスマートフォンで利用してもらった。

完成したポスターは、海の絵を描いて仲間分けをしているものが多かったが、なかには「オリンピック種目」や「居酒屋メニュー」といったテーマでそれぞれの分類群の特徴を生かしたポスター作りをしたグループもあった。制作時間は70分としたが、実際にはその時間を超えるグループが多かった。講義の最後にはFormsを用いて事前学習と実習の授業評価アンケートを実施した(全10問、回収率100%)。



写真2 ポスターを制作している受講生

第10講：見学・調査

(担当：古賀、対面→対面)

ダンゴムシの飼育が生活の教科書に出てくるが、小学理科の教科書にも土壌動物としてミミズなどと共に登場する。中学理科の学習指導要領によると、土壌動物を生態系の分解者の例として学ばせる。参考までに新しい中学理科の教科書では、腸内細菌と下水処理場の微生物が分解者の他の例とされている。そこで今回、

身近な土壌動物の採集を実施した。野外活動を伴うため、受講生は1グループ40名前後に分かれ4週に渡った。前半2グループは雨天のため座学のみとなり、後半2グループは天候に恵まれ教室で簡単な解説の後に野外で採集を行った。受講生は3～4人単位に分かれ、移植ゴテと剪定バサミを用いて講義棟周辺の土を深さ10cmほど掘り起こし生き物を採集した(写真3)。ダンゴムシ以外にアリやクモがよく採集されていた。花壇や畑の土と異なり、剪定バサミで植物の根を切らないと土を掘り起こせないことも学生には新鮮なようであった。しかし、受講生のレポートを読み最も興味深かったのは、やはり体験の重要性である。座学のみだったレポートでは、児童生徒が土壌動物に親しむことの重要性を頭では理解しても、自分は虫が苦手なので先生になってもやりたくない(やる必要はない)といった記述が散見された。一方、採集を体験したレポートでは、虫は苦手なので採集できないと思っていたが熱心な友達と一緒にだと何とかかなり、今回虫に少し慣れた気がするという、受講生の学びあいによる虫嫌い克服の可能性を感じさせる記述が複数見られた。



写真3 野外活動で土壌生物の採集を行う受講生

第11講：国際理解

(担当：谷尻、対面→対面)

受講生の大半は教育実習を数ヶ月後に控えている。そこで、導入で、あるいじめ場面を想定して、「こんなとき、自分ならどうするか」という問いをなげかけ、考えさせた。これは担当教員が実際に経験した場面である。この問題を指導した後、いわゆるいじめの構図を用いて「傍観者が立ち上がること」を生徒たちに訴えるも、現実には簡単にいじめの関係は解消出来ず、生徒集団の人間関係を根本から変えるような学びと活動を重ねて、事態を克服していったことを説明した。この時に、取り組んだのが『アジア・アフリカの子どもたち』という探究的な学習である。生徒は六つの班に分かれ、中国・インド・フィリピン・カンボジア・サウジアラビア・南アフリカの六か国をそれぞれ分担する。書籍やインターネットといったものにとどまらず、大使館やNGOにも手紙を書いたり電話をかけた

りするなど、旺盛なリサーチをして、各国の子どもたちの生活に迫っていく。リサーチと発表で合計10時間かけた学習であったが、その後、生徒たちから「自分たちで貧困国の子どもたちを支援したい」と声が上がリ、テレホンカードを全校生徒から集め、貧困国の子どもを支援しようという自主的な活動へ発展していく。

書籍として出版もされているこの実践記録「荒れる生徒に向かい合う総合学習」(谷尻1999)をもとに、「生徒たちはなぜ変わったのか。生徒や学級の成長につながる教師の指導やしかけ・支援になっているところ」に着目させ、受講生が個人で考えたものを付箋に書き出し、グループでKJ法を用いて分析し発表させた。レポートのテーマは「本時の授業で印象に残ったこと」とした。



写真4 KJ法による事例分析の発表風景

第12講：地域連携・SDGs

(担当：ゲストティーチャー Y先生、対面→対面)

90分の講義で三つのテーマについて講話された。まずは「(1) 地域に根ざした教育実践をめざして 熊野川中学校」というテーマである。初任時代、赴任した熊野川中学校で、夏休みに地域を巡り歩いて教材研究と人脈づくりに取り組んだこと、身近にある「ひと・もの・こと」を教材とする具体例として、紙芝居「かいもんさん」や創作劇「和田川の伝説」に取り組んだこと、森林学習・海外からの留学生との国際交流へ学習が広がっていったこと等、ダイナミックに話題が進んだ。

続いて、「(2) カリキュラムマネジメントの模索附属中学校(過去)」と題して、和歌山大学教育学部附属中学校の「総合」『W～ING』について、年度を追って具体的な内容が語られた。『W～ING』は3年間の見直しをもって、系統的にカリキュラムが組まれている。1年生の地域学習『和っぷる』の作成と活用、2年生の京都班別自主研修・職場体験、3年生の沖縄班別自主研修・知の冒険旅行と、それぞれ事前に綿密なリサーチを行ってから体験学習を実施し、それをレポートにまとめるというものである。紹介される沖縄環境学や沖縄平和学といったスライド等から一つひとつの学習

活動の質の高さがひしひしと伝わってくる。

最後に「(3) SDGsを柱にした3年間のカリキュラム開発 附属中学校(現在)」というテーマで、2019年度から2021年度にかけて取り組みが進んでいる学習『和歌山×SDGs』にも触れられた。1年次の「1st stage～私たちの現状と課題を調査する」、2年次の「2nd stage～課題解決に向けたアクションプランを考える」、3年次の「3rd stage～和歌山を持続可能にするプロジェクトを実施しよう」と系統立てて指導が重ねられ、年を追うごとに、学習内容の質が高まる様子を垣間見ることができた。

第13講：教科横断・カリキュラムマネジメント

(担当：ゲストティーチャー S先生・I先生、対面→対面)

海南市立亀川小学校のS先生とI先生が、教科書に囚われない教科横断型の「総合」の魅力と児童の興味・関心から学習を展開していくことの重要性を、具体的な事例をふんだんに交えて講話された。

冒頭、S先生から学習単元を組み立てる時に気を付けたいこととして「子どもの思いを引き出し、それをつないでいく」「発達に応じた課題設定を行う」「最後に必ずアウトプットさせる学習活動を設定」等、5点があげられた。

その後、児童公園で児童が見つけた課題に沿って児童自らが遊具を開発した「見つめよう 未来 伝えよう おもい」の実践、キャリア教育の視点を重視しつつ児童が大胆な発想で商品開発や販売をおこなった「キッズ ショップ」の実践、和歌山の魅力を発信する「和歌山みやげ PR プレゼンつくっちゃおう」の実践と、受講生が引き込まれる「総合」の事例を動画も交えて紹介された。

また、現場経験が2年あまりにすぎない若手のI先生は、海南市でキウイやびわといった果物生産が盛んであることに目を向けさせ、特産物をいかしたケーキのアイデアを具体化し、地元のケーキ店と連携して販売するという実践を紹介された。600個という売上を達成することで、児童の自己肯定感や達成感が高まることも実感できる事例である。いずれの事例も、「課題の設定」に時間をかけ発達段階に考慮して体験活動を十分にさせてから、学習のプロセスを展開しており、小学校実践のヒントを得た受講生が多かった。

第14講：情報活用能力・小規模校

(担当：ゲストティーチャー H先生、対面→対面)

日高町立笠松小学校に勤務するH先生が、極小規模校(全校生徒8～16名)といわれる日高町の3小学校が取り組んでいる実践を軸に講話された。

極小規模校は児童の数が少ないため、教師から丁寧な指導を受けられるという長所もあるが、「人間関係が

固定化する」「集団的学びあい欠如している」「社会性が育ちにくい」などの課題があるという。これらの課題を解決するために、ICTをフルに活用し、「学習意欲の向上」や「社会性と集団性の育成」に力を注いでいるという。

3校は距離が約10～20km離れているため、一箇所に集まった集合学習を度々持つことは難しい。そこで、テレビ会議システムを導入し、各校で行う「分習」と3校が集う「全集」を組み合わせることで、学びにリズムを作り、また、発展させる場としている。特に、テレビ会議システムを活用した遠隔合同授業を持つことで、各校で学んだことを発表し交流したり、モニターで顔を見合いながら合同授業をしたり、ゲストティーチャーをよんでお話を一緒に聴かせてもらう等の機会を設けている。この際、ICT機器を活用し他者と交流することで、日頃の学習のフィードバックも可能となり、短所を克服するだけでなく、学習の深化・進化に繋げている。また、タブレット端末やパソコンを低学年から使用することで、コロナ禍でも学びを止めることなく、学習が進んでいる様子が動画も交えて紹介された。

授業で紹介された、地域の魅力を発信する「ダムカレーづくり」や児童の創作演劇などは、いずれも受講生の興味を惹きつけ、活動が充実していることが一目瞭然であったことも付記したい。

第15講：学習状況の多様な評価法と留意点

(担当：谷尻、オンデマンド→オンデマンド)

導入で「評価は誰のためにつけるのか」という問いを投げかけ、それは児童・生徒のためだけでなく、教師・学校のためでもあり、学習指導の在り方を見直し、改善に繋げることが重要であるとおさえた(指導と評価の一体化)。その実現に向けて、PDCAサイクル、すなわち「指導計画等の作成」→「指導計画を踏まえた教育の実施」→「児童生徒の学習状況、指導計画等の評価」→「授業や指導計画等の改善」を、「総合」でも心がけなければならないことを強調した。

「総合」の学習評価については、受講生自身の記憶が薄い可能性があることと推察されたので、下記(資料3)の例をあげて、イメージの共有化を図った。特に、数字で評価するのではなく、児童生徒の良い点や進歩の状況などを文章化するものであること、その際、観点は他の教科で示されている、「①知識・技能、②思考・判断・表現、③主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点に準拠して各校が設定するとなっていることを説明した。また、評価する際の具体的な方法として、「発表やプレゼンテーションなどの表現による評価」「レポート、ノート、論文、絵などの制作物による評価」「ポートフォリオを活用した評価」「自己評価や相互評価」など多様なものがあることも付け加えた。以上、

音声付きパワーポイント動画による説明を視聴させ、レポートは「この授業で初めて知ったことと疑問点」についてまとめさせた。続いてもう一つのパワーポイント動画でプレゼンテーション作成について説明をおこなった。

学習活動	観 点	評 価
地域紹介新聞の作成	主体的に探究し、まとめる能力	地域調べでは、「〇〇市のゴミ処理」について、文書資料、フィールドワーク、インターネットなどを利用して必要な情報を収集し、分かりやすく新聞にまとめることができた。

資料3 「総合」の評価イメージ

4. 体験・探究活動の重視

4.1 体験活動を重視した授業展開

体験的に学ぶことが「総合」の時間の基本であることは受講生も理解している。「総合」＝「体験」ととらえている者も多い。そこで、本授業でも、できる限り学校現場で行われている「総合」の体験活動を取り入れ、受講生に「本物」の「総合」の時間を体感してもらいたいと考えた。

ここでは、本稿「3. 実際の授業」第4講でも触れた、新聞を活用した「総合」の時間の受講生の模擬体験の様子を紹介する。

受講生はまず、自身が用意した新聞から気になる記事を選ぶことから学習をスタートさせた。新聞には様々なジャンルの情報が網羅されており、その一つひとつは複数の目による厳しいチェックを経ている信頼性の高いメディアである。ウェブ上でもたくさんの情報を得ることができるが、その信憑性が不確かな情報も多い。そんな記事の中から「総合」で「ぜひ取り上げたい」と指導者が考えるような話題を探すのである。いわゆる「探究課題」を見つける作業の体験である。普段新聞を読まない受講生も、熱心に記事を読み、「課題見つけ」を行っていた。

今回の授業で受講者が選んだ記事は、おおまかに以下のようなジャンルのものであった(資料4)。

時節柄、新型コロナ関連やオリパラ関係の記事が多かったが、環境問題を扱った記事や国際情勢(国際理

記事ジャンル	人数	記事ジャンル	人数
新型コロナ	20	情報	3
環境	10	福祉	3
裁判	8	地域	3
オリ・パラ	6	安全	2
国際情勢	4	自然	2
社会	4	パワハラ	2
政治・経済	4	虐待	1
		健康	1

資料4 受講生が選んだ新聞記事

解)・情報・福祉・地域・安全・自然等、「総合」の時間に扱われるテーマとなりそうな記事がたくさんあった。この体験から、課題設定の一手段としての新聞活用、また、情報収集の手立てとしての新聞利用等、新聞活用のメリットを感じたようである。この後、受講生はペアになり、自身が選んだ記事の内容について相手に伝えたり、記事に対する感想を聞き取り自身の考えと比較したりと、学校現場で実際に児童生徒が体験する新聞記事の読み取り活動を体験した。受講生が選んだ記事とその感想の一部を紹介する(原文のまま)。

- ・「小分け総菜 コンビニ強化」6/24 読売 朝刊
少量の商品を多くの種類で販売するというローソンの取組。女性などのニーズにあった方法で、食品ロスも減るのではないだろうか。
- ・「夫婦同姓 再び合憲」6/24 朝日 朝刊
選択的夫婦別姓という考えをペアの人は主張したが、私はやはり夫婦別姓は認めるべきだと思う。中学校社会科の公民分野でこのような話し合いは十分可能だと思うし、新聞記事は生徒の考えを引く出すアイテムになると思う。
- ・「ドイツ 温室ガス 45年ゼロ」5/13 毎日 朝刊
ドイツがこの目標を掲げた背景には若者の声が大きく関与していると書かれている。子どもたちにもこういう記事を読ませて、環境保全に対する積極的な考えを持たせていきたい。

4.2 探究活動を重視したプレゼンテーション作成

受講生は、全十五講を受講する中で、探究的な学びはどのように行われるのかというイメージは多少なりとも持てたであろうが、学校現場で探究活動を指導することを想定すると果たしてそれだけで十分であろうか。やはり、自ら学校現場で行われるような探究活動を体験してこそ、生きた学びとなるのではないか。このような問題意識をもって、講義の後半時期から、受講生全員にプレゼンテーションの作成に挑ませることとした。以下が、その説明内容である。

- ★共通テーマは『2025 大阪・関西万博をとことん追究』とする。最終ゴールは「自分で決めた研究テーマのプレゼンテーションを完成させること」。
- ★プレゼンは、対象学年を設定し、わかりやすく興味をひくものに仕上げる。発表原稿だけでなく、発表の際に用いる提示資料や配付資料も添えて提出する。なお、対象学年は小学校5年生か中学校2年生のいずれかを選ぶ。プレゼンの時間は8～10分(文字数で3000～4000字)とする。
- ★研究テーマは〇〇たい(隊)とする。テーマ例として「ア 1970 大阪万博調べたい(隊)」「イ 国際万博の歴史調べたい(隊)」「ウ 2025 万博のテーマを追究したい(隊)」等、9つをあらかじめあげておいたが、大阪・関西万博に関連があり、他に適切な研

究テーマがあればそれを追究してもよい。

今年度、共通テーマとして、『2025 大阪・関西万博』を取り上げた理由はいくつかあるが、受講生が学んだことが後々にいってくるほうが、学びがよいと考えたことが要因の一つである。受講生は3回生が中心であり、あと1年あまりで社会へ出ることになる。出身地などを考慮すると、おそらく関西圏で教員となる者が半数を超えるであろう。教員にならなくても、公務員や企業の一員としてこの万博に関わることは大いにあり得ることである。プレゼンテーションの作成で、しっかりとリサーチしたことや「探究の過程」を踏みながら原稿とパワーポイント（資料5）をまとめる体験は、将来の生活に直結するであろうという見通しをもつてのことである。

このプレゼンテーションについては、事前のオンデマンドでの説明から、提出締切まで1ヶ月以上の間を設けた。十分なリサーチを受講生に体験させたいためである。提出されたプレゼンテーションの内容やスライドは、168名分を丁寧に確認し、評価した。インターネット上の情報のみならず、出版されたばかりの書籍を購入して、現時点での最新状況を反映させた者や1970年の大阪万博を体験した近親者にインタビューしていた者が少なからずいた。また、実際に万博跡地に現地調査に赴き、事前予約して太陽の塔にも入った受講生も数名いたことがわかった。



資料5 プレゼンとあわせて作成されたスライド

以下はプレゼン原稿より一部抜粋したものである。

- 太陽の塔の中に入った感想を言います。私は前から太陽の塔を知っていましたが、実際に行ってそびえたつ太陽の塔を目にして、中に入ってみるのは、見たことがあるのと全然違います。中に入り、「生命の樹」を見ると、岡本太郎の偉大さ、当時の人たちの万博への思いが自然と想像され、感動しました。これは、実際に現地に向かった人にもみわかることで、そのため、次の2025年の万博も行ってみたいと感じることがあると思います。
- 1970年万博経験者として、私のおじいちゃんにインタビューしてみました。「大阪万博には、僕が中学

校の時に家族みんなで行ったよ。万博には本当にたくさんの人が来ていて、テーマ館やアメリカ館などの目玉となった建物には行けなかったんだ。残念だったよ。その当時は、外国の人と関わる機会が今ほど多くなくて、珍しかったから、万博で話す機会があるかと思って英会話を習いに行ったよ。実際は外国の方と話す機会は全くなかったけどね。」とのこと。内容はあまり覚えていないらしいですが、とにかく人がものすごくいてにぎわっていたことが分かりました。しかし、混雑が激しすぎて、太陽の塔やアメリカ館など人気なところには行けなかったそう。万博の盛り上がりが非常によく分かります。

なお、プレゼン原稿を作る際の注意点の一つとして、いかに分かりやすく伝えるかを十分に考慮することを強調した。学校現場では、事典やネット情報の丸写しで意味も良く理解できないまま、発表している場面にしばしば遭遇する（そうさせているのは教師が原因だが）。分かりやすく伝えるためには言葉の厳選や言い換えが必須であることも強調していた。その一端は原稿からうかがえるであろう。

5. 成果と課題

5.1 成果

授業の成果を示す指標として、受講生から寄せられた授業評価アンケートの結果を取り上げる。授業評価はWeb上で受講生が回答するもので、5段階である。受講生（登録者）170名に対し、43名の回答が寄せられた。主な項目と結果（%）を資料6に示す（一部、抜粋）。

質問	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
12. 学生参加の機会は十分にありましたか	72.1	25.6	2.3	0.0	0.0
13. 宿題などによって自発的に学習を促す工夫がなされていましたか	55.8	27.9	11.6	4.7	0.0
15. この授業で、新しい知識・考え方・スキル等が習得できましたか	67.4	30.2	2.3	0.0	0.0
16. この授業に関係する分野への興味関心が強くなりましたか	67.4	25.6	0.0	4.7	2.3
17. この授業の満足度を評価してください	よい 69.8	ややよい 23.3	7.0	やや悪い 0.0	悪い 0.0

資料6 授業評価アンケート

項目15の「この授業で、新しい知識・考え方・スキル等が修得できましたか」や、項目16の「この授業に関する分野への興味関心が強くなりましたか」に対し、「そう思う」「ややそう思う」を合わせるといずれも90%超となったこと、総括的な評価である項目17の

「この授業の満足度」で「よい」「ややよい」を合わせると約93%となったことから、授業の目標はおおむね達成できていると思われる。自由記述欄にも「全授業対面で受けたかったです。仕方のないこととはいえ、とても興味深い授業が多かったため、残念でした。」「班活動を取り入れることで、他の人と意見を交換することが出来た点が有益であった。また、万博について調べてまとめることで、生徒の立場から総合の活動を行うことが出来た。」「個人的に、今期の授業の中で1番楽しく実りある授業でした。」「現役の先生方に来ていただいた集中講義や実際に体験する授業など、有意義な学びがたくさんできてきています。」などの声が寄せられた。その一方、「コロナ禍であるが、向かい合っただけのグループ活動が多く、間隔も密だったので、少し不安だった。」といった新型コロナ感染を危惧する不安な気持ちを吐露したものもあった。

5.2 課題

課題としては、「1クラスの受講規模」「教員の負担」の2点があげられる。

課題の一つ目は「1クラスの受講規模」の検討である。2021年度は受講生が170名であり、計画段階から「この規模で、総合の指導法を体験的・協働的に行うにはかなり無理がある」と判断し、オンデマンドで実施せざるを得ない第1講・第8講・第15講を除いて、対面の授業では受講生を2分割もしくは4分割して実施した。結果的にはこの規模だからこそ、移動型の机を用いて、グループ活動なども随時取り入れることが出来た。それでも、グループワーク後の発表などは、かろうじて一斉発表形式（教室のあちこちで同時に発表する）を取り入れることで最低限の形を整えたにすぎない。じっくりと落ち着いて他グループの成果を共有するところまでは出来ていないのが実情である。

二つ目の課題としてあげたのが「教員の負担」である。毎回の課題レポートを読んで評価する作業量や、欠席者・レポート未提出者への連絡と対応だけでも相当の時間が必要であった。さらに、3000～4000字のプレゼンテーション原稿に加え、パワーポイントスライドの内容も確認しつつの評価となるため、膨大な時間を要することとなった。自然科学系の「観察・実験」や「調査・見学」となると、教材・教具の準備と後始末もあり、担当教員の負担は軽くはなからう。持続可能な授業づくりという点を考えると、いずれ、教員負担の軽減を念頭においたシフトチェンジが必要とならう。

6. まとめ

担当教員で連絡を密に取り、工夫を重ねて運営した「指導法」である。受講生にとっては自らの学習履歴を

振り返ると共に、これからの指導にいかせるであろう視点や具体的手法が少なからず見つかったことと思われる。が、はたして学生が、現場に出てすぐに「総合」を指導できる段階まで資質・能力を高めることが出来たかと問われるとまだまだ不安が残る。赴任した学校で、地域の実態や児童生徒の実態に応じ、探究するにふさわしい「総合」を企画し実施するには経験を積むことが必要である。それは、受講生たちの小中学校時代の「総合」体験の格差も一因である。格差を埋めるために必要なひとつは、講義の中や最終段階における、受講生自身による省察である。講義で得た新たな知見を整理し、今後、探究的な学びを実践するに何が必要か、どのように学びを構成し指導すれば良いか等、全十五講後に省察を丁寧に行う必要があることが、新たなテーマとして浮き上がった。

90分授業を十五講重ねることで、受講生の資質・能力をさらに高める「指導法」とするにはどのような授業構成とすれば良いのか。他大学での成果から学び、改善に繋がたいと考えている。

参考文献・引用文献

- ・弘前大学 (2021a)、アクティブラーニングの実施状況をふまえた「総合的な学習の時間の指導法」の開発 第1分冊「総合的な学習の時間の指導法」におけるアクティブラーニングの実施状況報告書
- ・弘前大学 (2021b)、アクティブラーニングの実施状況をふまえた「総合的な学習の時間の指導法」の開発 第2分冊「総合的な学習の時間の指導法」におけるアクティブラーニングハンドブック
- ・栗山靖弘 (2020)、教職課程科目「総合的な学習の時間の指導法」に関する理論的考察－受講者の学習経験に注目して－、鹿屋体育大学学術研究紀要、第57号、pp.125-135.
- ・文部科学省、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編
- ・文部科学省、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編
- ・国立教育政策研究所 (2017)、平成29年度全国学力・学習状況調査【小学校】調査結果資料
- ・谷尻治 (2005)、生徒自身がとことん追究－少年法調査隊、日本国憲法に会う授業、かもがわ出版、pp.81-110.
- ・谷尻治 (1999)、荒れる生徒に向かい合う総合学習、共同でつくる総合学習の【実践】、フォーラム・A、pp.189-226.

註

- 1) 2001～06年、京都市教育委員会指定・みやこ学校創世事業「みやこステップアップ・スクール」、生徒を育てる「総合的な学習の時間」－社会をみつめ、未来に向かってたくましく生きる－ HUMAN TIME
- 2) 環境については第9講～第11講の「観察・実験」「調査・見学」で取り上げる。「観察・実験」「見学・調査」は担当教員

の専門分野をいかしたものであるが、小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編で「観察・実験，見学や調査，発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること」と示さ

れているものである。また、福祉・健康については、第5講「中等教育 学習計画」で取り上げる。

